

4 年 2 組

わたしの手で 新たな価値を ～廃棄を無くそうプロジェクト～



4月、子どもたちと今年度の活動について語り合いました。「動物を飼いたい」「おやつ作りをしたい」と語っていく子どもたち。なぜ、そのような活動をしてみたいと思っているのか、その活動からどのようなことが学べそうなのかと、語り合いを続けていくと、「今までのくらしの中で学んだことを生かしたい」「誰かを笑顔にしたい」という子どもたちの願いが見えてきました。そのような中で、わたしたちの願いと重なる願いをもって活動しているカフェが県内にあることを知りました。廃棄になっているリンゴでケーキを作っているカフェです。その映像資料の中で店主が語る「無駄にしない」「お客さんが笑顔になったらうれしい」などの思いに対し、「捨てられるもので誰かを喜ばせるなんてすごい」「わたしたちも、こういうことをしてきたからできそう」「やってみたい」と自分を寄せていった子どもたち。そうして、捨てられてしまっているものに価値づけし、それを販売し、得たお金を誰かの笑顔につなげるように使うという「廃棄を無くそうプロジェクト」が始動しました。

摘果リンゴも大切に育てたリンゴだから 救いたい

プロジェクトについて考えていく中で、近隣のリンゴ農園さんが傷ついてしまったリンゴを捨てないように、ジュースやコンポート、ドーナツに加工し販売しているということを知りました。子どもたちと、その農園さんの取り組みや思いをもっと感じたくなりました。そこで、農園さんからいただいたコンポートやジュースを味わってみたり、農園さんと一緒にドーナツを作ってみたりしました。Aさんは次のように振り返りました。



農園さんは大切に育てたリンゴを捨てる気持ちにはなれないのだと思います。傷がついたりボケたりしてしまっても、大切に育てたから、何とかしてみんなに美味しいリンゴを届けたいと思っています。だから、ボケてしまったリンゴもおいしく味わってほしいと思い、ドーナツにしてお客さんに届けているのだと思います。

Aさんは、生食用として販売できないリンゴであるにもかかわらず、農園さんの商品開発でおいしいドーナツとなり、わたしたちが笑顔になったことから、農園さんの思いを受け取っていました。一方で、この体験で用いたリンゴは加工してお客さんに届くので、廃棄ではないという事実もありました。しかし、摘果リンゴはそのまま落として土に返しているという事実も知りました。Bさんは次のように振り返りました。

摘果リンゴを世界中で食べてもらえるように頑張りたいと思いました。いい商品を作ってみんなに食べてもらえるようにしたい。そのために摘果リンゴにどのような特徴があるのか知りたいなと思いました。うまくいけば、摘果リンゴを救える可能性があるね。

Bさんは、この体験で農園さんが大切に育てたリンゴを加工して販売している内側にある思いを感じたからこそ、リンゴを育てる過程で土に返されている摘果リンゴもお客さんの笑顔につなげていきたいと願っていったのではないのでしょうか。そのような歩みの中で、農園さんの摘果リンゴの価値づけを始めました。

渋い 酸っぱい 無理かもしれない…

農園さんから摘果の作業をした際の摘果リンゴが届きました。手に取った子どもたちは、細かく観察していききました。次のような気づきがありました。

・においはリンゴに近い ・こんなに小さいのか（指先ぐらい） ・割ってみると白い種があった
・渋みがあった・酸味があった ・きれいな緑色だった ・中は白かった



観察をしていると次第に表情がくもっていく子どもたちの様子がありました。Cさんが「これは、絶対に食べられない…無理かもしれない」と語り始めたことをきっかけに、他の子どももCさんと同じ思いを語り始めました。子どもたちは、それ以前の体験で、傷ついたリンゴがおいしいドーナツへと価値づけされたことを体験しているため、摘果リンゴも「おいしくなるはずだ」と考えていたのだと思います。「食べる」という価値づけの難しさを感じていった子どもたちと、一度立ち止まりたくなりました。

「食べる」以外でも 他の良さを生かせるんじゃない？

実際の摘果リンゴを感じたり、友だちの立ち止まりたい思いを受け止めたりした子どもたち。Dさんが「この形の良さを生かして、キーホルダーをつくるというのはどう？」と語ると「いいね、おもしろそう」と共感するつぶやきが学級に広がりました。すると、「香りを生かしてアロマにするのはどう？」「リースにするのはどう？」などと、「食べる」以外の価値づけに目が向いていきました。そのような語り合いの中、「そのままでは食べられないけど、砂糖と合わせて、食べることだってできるんじゃない」と語り、「食べる」という価値づけに願いが向いている子もいました。この過程をEさんは次のように振り返りました。



味はとても食べられそうにない味で、だめだと思ったけど、実際摘果リンゴだってまずくなりたくてこんなものになったわけではないし、もう少し育てばおいしいリンゴになったはずだから、あきらめないでやってみようと思いました。

子どもたちは、前を向いていたのだと感じさせられました。摘果リンゴを活用したイベントの新聞記事を見せてくれる子どももいました。前向きな子どもたちと摘果リンゴの様々な可能性を見つめていきたいなと感じました。

そのように活動を進めていましたが、納得のいく成果が得られたものとそうでないものがあるということが見えてきました。摘果リンゴの除菌作用に着目していた子は「発酵が順調に進んだから、除菌効果を確かめたい」と、シロップ漬けに着目している子は「順調に砂糖が溶けてきた」と振り返りました。一方で、香りに着目していた子は、「思い通りの香りではなかった」と、キーホルダーやリースに着目していた子は「乾燥するときに茶色くなってしまう」と、課題が見えてきました。この過程をEさんは「発明は難しいけど、こうしたらこうなる、こうしなかったらこうなっちゃうということが分かってきた」、Fさんは「1回作るとは大きな一歩だと思う。これからも2歩3歩と頑張りたい」と振り返りました。うまくいかないことが停滞ではなく、大きな一歩だと感じられる子どもたちに試行錯誤の意味を学ばせてもらいました。今後の試行錯誤の中で、子どもたち全員が納得する価値づけを見つけていきたいと思いました。

「もの」の見え方が変わっていく



このプロジェクトを進めていく中で、「廃棄」と向き合い始める子どもたちの姿がありました。ドーナツの体験で用いた揚げ油を回収しているわたしに、「先生、それ捨てるの？」「もったいない…」と声をかけるGさん。揚げ油というものをそのような見方で見たことがなく、驚かされたと同時に、何か価値づけたいと思う私がいまいました。そこでキャンドルづくりをしてみました。摘果リンゴの価値づけについて語り合っている場面でHさんが「廃棄はほかにもあるじゃん、木だって捨てられているでしょ」とつぶやき、廃材となってしまう木にも価値づけをしてみたいという思いが学級に広がり、建築会社さんから捨てられてしまう木材を譲っていただき、食器づくりもしてみました。その加工の場面で出る削りカスを指さして、「先生これ捨てないでね、今袋もってくるから、もったいないじゃん」というIさん。当たり前のようにほうきではいて捨てていた削りカスをもったいないと感じていく姿がありました。「この4ヵ月を振り返って、廃棄でも、価値があるということを実感しました」。この言葉は、子どもの振り返りの中の言葉です。わたしも同じように感じています。